8回のがんで僕が学んだこと

2017年5月29日
週刊FRIDAY
2017年6月9日発行

俳優　黒沢年雄

「いまでも検査に行くし、年に一度の膀胱の検査では鉛筆くらいの太さの内視鏡を〝せがれ〟の尿道に突っ込んでね。そりゃイヤだよ～。でも、先生が『責任があるから来てくれ』って言うんだもん」

こう茶目っ気たっぷりに話すのは俳優・黒沢年雄(73)だ。実は現在までに8度のがん手術を経験している。

「'92年に48歳で最初のがん（大腸がん）になった時には家を建てたばかりで、ローンを抱えて、子どもも小学生。悩んだし、泣いたね。でも、メソメソしていられない。長男として家族の生活の面倒も見て来た。何人か世話になった恩人はいるけど、基本、全部自分でやってここまで来たんだ。『がんに勝ってやろう、このまんまじゃ、絶対に終われない！』って」

その3年前から下血をしていたが、主治医からは痔だとの診断を受けていた。知り合いの別の医師から内視鏡検査を勧められ、大腸がんが発覚したのだった。黒沢が16歳の時に、わずか40歳という若さで母親が喉頭がんで亡くなるという〝トラウマ〟もあった。「もう治らない」と、ショックを受けたが、生来の責任感とポジティブさは、そこで黒沢を挫けさせなかった。ポリープ除去手術も短時間で済み、わずかに残ったリンパ節への転移の可能性を取り除くため、周辺も切除した。

「術後、すぐに歩いてね。周りが『スゴい、スゴい！』なんて言ってくれると、また調子に乗っちゃってね」

しかし最初の大腸がんの後、'08年9月に膀胱がんが発覚、手術をした。さらに'13年中に食道がん・胃がんで4回手術、そして、'15年1月に食道がん、'16年2月にも再び膀胱がんで切除手術を受けた。だが、黒沢に悲壮感はなかった。

「'13年中に受けた4度の手術はそりゃイヤだったけど、とくに達観できたのはその時だね。よくよく考えたら、僕の頭の中にがんというものが普段はまったくないんだ。立ち向かわない。意識しないのが良いんだ。医師から僕の進行具合では抗がん剤治療も放射線治療も必要ないと言われ、実は何もしていない。検査でがんが発見されればそこで切除をする。それだけなんだよ」

――がんを宣告され、必要以上に落ち込んだりするのが、良くないのでしょうか。

「それは人それぞれだと思う。それまで積み重ねた経験というものがあると思うからね。悔いが残っている人は怖がるだろうし。考えてみると、僕は才能も美貌もないのに成功できた。これ以上、欲張るのは贅沢。いまは何の物欲もない。週に1回ゴルフして、週に2回くらいテニスして。仕事も順調で最高の人生なんだ。またがんは来るでしょう。でも、保険金も下りて、何だか得した気分になる位で(笑)。切除して助かるなら、そうするけど。死ぬのも怖くない。家族には、『延命治療はイヤ。でも、痛いのもイヤだから、モルヒネはバンバン打って』って」

'16年3月には生前葬も済ませているという黒沢は、最後にこう語ってくれた。

「がんへの対処で『こうであるべき』なんて、僕は言えない。ただ僕の場合、幸運なことに、信頼できる医師に見て貰って、手の施しようがなくなる前に切除できた。がんは恐れる病気ではないんだ。ただし、早めの検診があればね」

　PHOTO▶結束武郎